



Contents

- ソチオリンピック銀メダリスト 葛西紀明選手インタビュー
「金メダルを目指す！！夢をかなえるために必要なこと」
- 学長とケアの未来を語る：名寄市立大学の目指すものとは
- ようこそ研究室へ：研究室紹介・平成26年度科学研究費補助金獲得状況
- キャンパスライフ：サークル紹介「星楽流（ほたる）」・サークル活動報告
- NCU Information：入学式挙行・農業体験実習・サイエンスカフェ



特集：インタビュー ソチオリンピック 銀メダリスト 葛西紀明選手

2014年ソチオリンピックに出場し、見事銀メダルを獲得しただけではなく、ワールドカップ最年長優勝、冬季五輪7大会連続最多出場、冬季五輪スキージャンプ最年長メダリストがギネス記録に認定された、まさにスキージャンプ界の「レジェンド」葛西紀明選手。長く競技を続けられる理由やモチベーションの保ち方、そして「夢」を持ち続けることの大切さを学生達に語ってくれました。

金メダルを目指す！！ 夢をかなえるために必要なこと

子どもの頃から運動神経抜群！！

山本：葛西選手は名寄の隣町の下川町出身と伺っているのですが、子どもの頃はどのようなお子さんだったのですか？

葛西：僕は泣き虫で、負けず嫌いで、小さい頃は体が弱かったですね。体を強くするために、マラソンを始めました。マラソンの影響で体も少し丈夫になって、冬はクロスカントリースキーをやるようになりました。クロスカントリースキー場の近くにジャンプ台があって、友達と遊んで飛んでみて、「おもしろいな」と思い、それがジャンプを始めるきっかけになりました。

山本：初めて飛んだときはどのような感じでした？

葛西：怖かったですけど、友達より飛べていたのもっと飛んでやるのかなと思いながら飛んでいました。

高原：負けず嫌いなんですね。

葛西：そうですね。ジャンプは9歳から始めたのですが、遠くへ飛ぶために人一倍練習しましたね。でも中学にはスキー部がなくて、陸上部に入りました。足も速かったんですよ。体を鍛えるために始めたマラソンですが、負けるのがいやで、一生懸命走っているうちに、下川町で一番早くなっていましたね。

競技を長く続けるために

小山：葛西選手は、スキージャンプ選手として生きていく決心をしたときに不安はありませんでしたか？

葛西：いろいろなスポーツをやりましたが、ジャンプが一番好きでした。ただし、ジャンプが好きだから、簡単に自分で「ジャンプ選手として生きていく」と決められる家庭環境ではありませんでした。当時、家が経済的に貧しく、ジャンプより道具を買うことによる家計の方が心配でした。ただ、小学生高学年には他のライバルに負けにくいくらい強くなっていたので、その頃には絶対世界一になって、親に家を建てようという目標を掲げましたね。

小山：目標実現にはハングリー精神は大切ですか？

葛西：それがあったから強くなれたと思います。昔は貧乏であることを恥ずかしく感じたこともありましたが、今はそれが自分を強くしたきっかけだと思っています。

山本：葛西選手は現在「レジェンド」と呼ばれるほど競技生活が長く、またすばらしい成績を残されていますが、ここまで長く選手を続けられる理由やモチベーションを維持する秘訣があったら教えてください。

葛西：ここまでやって来られた理由はたくさんありますが、1番はスキーが好きだということ。33年間スキージャンプをやってきましたが、やめたいと思ったことは一度もないです。これまでに、4年に一度のオリンピック7回、2年に一度の世界選手権12回、ワールドカップは450試合くらい出ています。でも、ワールドカップで勝ったのは16勝だけです。オリンピックでは、銀メダルと銅メダルはありますが、金メダルは取っていません。世界選手権でも金メダルは取っていません。つまり、私は、試合にほとんど負けています。負けているという悔しさを「いつか金メダル取る」とか「優勝する」というモチベーションに変えてこれまでやってきました。あとは、いろいろなことがあった中でも家族、友人や知人、ファンの方が凄く応援してくれたこともモチベーションの維持につながっています。そして会社の方については、これまでに在籍した会社を始め、現在は土屋ホームで長くスキーを続けさせてもらっています。スキーを続けさせてくれる会社のために恩返しすることも含めて、全てが僕のモチベーションになっています。



自分に厳しく！！体調管理

高原：ジャンプ競技はルール改正に伴って、厳しい体重管理を求められると聞いたことがあります。私だと好きなものを好きなだけ食べたいと思ってしまいますが、体重管理のため心がけていることはありますか？

葛西：土屋ホームに入社した10年ほど前に、栄養管理のために栄養士や調理師を伴って合宿をしたことがあり、体に負担のかからない五大栄養素のいろいろな役割を教えてもらいました。その時の知識を利用して今は自分で栄養管理しています。炭水化物やタンパク質を取ってあまり油を取らないとか。ただ、40歳を過ぎてから減量で体重が落ちにくくなっています。そんなときは3日間断食します。もちろん午前と午後にトレーニングをしながらです。

高原：ボクシングの選手のような減量ですね。

葛西：僕は筋力があるので、落とす部分は脂肪しかない状態です。筋力を落とさないように減量します。シーズン中は体脂肪率が5～6%です。断食は精神修行にもなります。断食すると神経が研ぎ澄まされる感じがします。ジャンプの試合に向かうときも凄く集中できるというか、流れが見えるような感じになります。でも辛いですけどね。他の選手が何かを食べていても食べたいとは思いません。勝ちたい気持ちが強くて、誘惑に負けて食べることはないです。

諦めずに継続を！！

小山：私たちは保健・医療・福祉の専門家として将来働きたいと考えています。葛西さんはジャンプですが、専門家としてその道の専門性を極めるために必要なことはありますか？

葛西：僕の中では、ジャンプ競技が完璧にできているわけではなくて、まだまだもっと勉強しなくてはならないことがあります。自分の中では「自分で一生懸命努力して夢を叶える」を座右の銘としています。諦めず、継



山本：葛西選手は、様々なスタッフとチームを組んで世界に挑んでいます。私たちが様々な専門性を学ぶと同時にそれぞれの専門性を理解し、就職後の連携を意識したカリキュラムを取り入れています。様々な専門家と一つの目標を目指すチームを作るにあたって大切にしていることは何ですか？

葛西：自分は恥ずかしがり屋で口べたですが、みんなと楽しくやりたいと常々思っています。

山本：人との関わり方の中で、若い頃と今では違う部分がありますか？

葛西：2002年のソルトレイクオリンピックは4回目のオリンピックだったのですが、当時は、非常に体も作っていてメンタルの勉強もしていました。ただ、技術が伴わなくて、さんざんな成績に終わりました。その次の年に、トレーニングのやり方を変えるため、フィンランド人のコーチを呼びました。フィンランド人のコーチは僕より三歳年下だったので昔の自分であれば、「自分の方が年上だからアドバイスはいらない」と思ったはずですが、でも、2002年のオリンピックで打ちのめされたので、「これは変わらなくてはいけない」と思い、年下のコーチのアドバイスを聞いて、頭を柔軟にして考え、それが功を奏して2003年の世界選手権で、団体戦金メダル、個人戦銅メダルを取ることができました。

山本：コーチから言われて結果が出なかったときは、どう思いますか？

葛西：人の責任にすることはなく、「自分がうまくいっていない」と考えるようにしています。そう考えるのがストレスにもなりましたが、自分の中で消化していましたね。悔しさを心の中に秘めて外に出さないようにしていました。「いつか絶対成功する」という気持ちでやっていました。



写真は名寄の厳寒の日に起こるサンピラー現象

名寄の雪質は世界一！！

山本：世界を相手に戦っている葛西選手ですが、様々なところに行かれて日本や北海道の優れていると思う点や劣っていると思う点があったら教えてください。

葛西：日本は食が世界一です。どこ行っても日本食を食べたいと思います。日本の中でも、北海道が一番ですね。海外の選手も北海道の食べ物が一番おいしいと言ってますね。

山本：そうなんですか。

葛西：みんな世界一おいしいと言っていますね。フィンランド人のコーチも、日本食大好きで「納豆が一番おいしい」と言っています。また、海外選手は、「日本人の気遣いが凄い、優しい」と言っていましたね。落とす物しても、すぐ拾ってくれたりして凄く優しいと言っていました。また、僕が行った国では、皆さんよくしてくれますね。日本人は凄いという感じですね。

山本：葛西選手からみて北海道や日本が劣っている点はないですか？

葛西：ジャンプのルール改正などの面では、日本は情報が入ってくるのが遅いですし、強く意見することできないので、言われるがままにルール改正も受け入れてしまいます。そのような優しさはிரないと思います。こういう点が、劣っている点と言えるかもしれませんね。

新田：名寄は「雪質日本一」の町ですが、世界の雪を知っている葛西選手から見て、名寄の雪は世界で何番目くらいですか？



葛西：自分がこれまでに行った国の中では、世界一ですね。海外のジャンプ台は汚い雪で、べちゃべちゃしています。フィンランドは寒い国で、マイナス30℃くらいになり、名寄とほぼ同じですが、あまり雪が降らないです。雪がぱらっと降ってずっと寒い感じですね。11月くらいに降った雪がマイナス30℃くらいの気温のおかげで残っています。そのため、ジャンプ台の雪はそんなに良い雪ではないです。ドイツもオーストリアも、それほどものではないです。スイスとかイタリア、フランスの山の上に行けば、名寄に近い雪があるところもありますがこんなに身近にきれいな雪がみれるところは、名寄でしか見たことがないですね。手にとって雪の結晶がみえるような雪はないですね。

家族で金メダル

新田：これからの目標について教えてください。

葛西：銀メダルと銅メダルを取った後、すぐ「金メダルを目標に」と自然に言葉が出ました。また、私ごとですが世間を騒がせているレジェンド葛西は結婚しました。今はあまり家に居ることができませんが、これもレジェンドの宿命として受け止めて、4年後のピョンチャンオリンピックに家族と一緒に金メダルを取りたいというのが、一つの目標ですね。



山本：最後に、名寄市立大学の学生にメッセージをお願いします。

葛西：努力すれば絶対に夢は叶いますし、成功を納めるために人生があると思います。これからいろいろな辛いこともあると思いますが、そのようなときにはいろいろなものの見方とか、考え方を変えると人生も変わると思います。あとは、成功するためには、夢を見たり目標立てたりして最善を尽くせば必ず成功すると思うので、夢を大きく持って、なりたいたいものや目標を見つけてやってもらいたいなと思います。僕も諦めずに、自分の夢は金メダルなので、それを諦めずにやり続けて、いつか金メダルを取りたいと思います。

PROFILE

葛西紀明（所属：土屋ホームスキー部 監督兼選手・株式会社土屋ホーム 住宅部門本店 部長）
1972年北海道下川町生まれ。小学3年生でスキーを始める。2003年イタリアのヴァル・ディ・フィエンメで開催されたノルディック世界選手権大会では団体銀、ノーマル・ラージとも銅の3つのメダルを獲得。2014年1月11日バート・ミッテンドルフ大会（フライングヒル/オーストリア）でワールドカップ最年長優勝を果たす。（41歳219日=通算16勝目、日本人男子最多勝利）2014年2月のソチオリンピックでは個人ラージヒル銀、団体銅の2つのメダルを獲得。2014年3月、ワールドカップ最年長優勝、冬季五輪7大会連続最多出場、冬季五輪スキージャンプ最年長優勝の3つがギネス世界記録に認定される。



山本彩香
栄養学科3年（岩手第一高校出身）

葛西選手の貴重な話を聞くことができ、本当に嬉しい気持ちでいっぱいです。世界で活躍している選手としての自信に満ちた様子が、とても印象的でした。葛西選手の夢に向かって進んでいく姿を見習い、私も頑張ろうと思います！



高原明穂
看護学科3年（旭川西高校出身）

今回の座談会で改めて葛西選手の偉大さを実感しました。私はこれから医療従事者を目指す過程において、様々な困難にぶつかることもあると思います。しかし、夢を諦めずに努力し続ければ叶うということを葛西選手に身を持って教えていただきました。



小山歩美
社会福祉学科3年（気仙沼高校出身）

夢を大きく持ち、それに向かって諦めずに努力することの大切さが話の端々から感じられ、自分の将来の夢のために今できること、しなければならぬことについてしっかりと考えていこうという気持ちになりました。私も将来、プロとして働いていくために妥協せずに努力をしていきたいと思っています。



新田早留奈
児童学科1年（佐呂間高校出身）

葛西選手は、すごく前向きで、明るい方で、自分の方が元気を頂いた感じがします。葛西選手のようにもっともっと目標に向かって頑張ろうと思いました。次のオリンピックで、目標の金メダルが獲得できるように心から応援したいと思っています。

学長とケアの未来を語る

名寄市立大学は「ケアの未来をひらく」ことを目指して学生教育をしています。それぞれの学科等が考えている「ケア」、そして、それぞれの持つ価値観の違いを共有するために必要な連携教育の可能性について青木学長と5名の教員で語り合いました。

「ケア」について考え、学ぶことの意義



青木学長：保健・医療・福祉そして保育に関わる人材を育てる大学の学長になって、それぞれの専門性が持つ価値観について、様々な書籍などを読み、また、学科教員の話も聞きながら理解を深めてきました。それで分かったことは、看護を例に考えても、対象者の状況や看護領域などによって、例えば「心」に重きを置くのか、「技術」に重きを置くのかという違いが出てくると言うこと。その違いをお互いに主張し合うばかりでは、お互いの専門性の理解にはつながらない。だからこそ、各専門性に共通する「ケア」と言うことを中心に据えて考えてみるのが大切。本学の学科構成はケアを考える上で最もふさわしい構成になっていると考えています。



長谷川：確かに、看護の各領域でケアに対する考え方に違いがあります。例えば、精神看護では、対象者自身の自己理解が重要になります。これは、自分の持つ感情とそこから表出する行動に深い関係があるためです。その部分をしっかりとケアすることが精神看護では重要です。でも、他の領域では、アプローチが異なるので、ケア感も異なってきます。様々なケア感が存在することを学生に提示して、その存在を理解し、多様なケア感のなかで自分なりの考え方をしっかり持たせることが重要ですね。もちろん、看護師として就職すると、その組織でもまた組織なりのケアに対する価値観が存在しますので、それも尊重しつつ自分のケア感をしっかり持った学生を育てたいですね。



松岡：福祉の世界では、ケアを必要とする人々の主体性や選択する力をまず大切にします。そしてケアを必要とする人々の生活や社会関係・環境を必要であればアセスメントし、相談・支援をしていきます。このように考えればケアを必要とする人々に、いかに寄り添ったケアができるか、そして生活や社会環境をよく理解してうえで、ケアが必要な人々にケアを行えるかだと思います。

本学でケアの本質を常に頭に置きながら福祉を学ぶことは、専門職者として行うべきケアの姿勢や価値、社会の趨勢に合わせたケアを提供する力につながると思います。



市川：管理栄養士は、対象者に対しては「指導」という向き合い方が非常に多くなります。したがって、「ケア」という言葉には馴染みが薄いように感じますが、実は「ケア」における食の問題は非常に大きな要素を占めていると思っています。栄養管理において、栄養素やエネルギーの話を対象者が理解できるように説明し、さらにそれを如何にして食事という部分に具現化するのかということはとても大切です。管理栄養士が対応すべき対象者は広いですが、例えば、入院患者が退院後も健康を維持できるように、食を通じて導いていくことが管理栄養士が行うべき一つのケアであると思います。



中西：保育における「ケア」について考えるとき、問題となるのは教育との関係性であると思います。保育では、「養護（ケア）と教育の一体性」が重要視されていますが、実際には両者の分離が問題となっています。教育との関係性の中で、「ケア」という言葉は「子守り」や「世話」というようにとても狭い意味で使用されがちです。そのような状況を打開するために今求められることは、保育における「ケア」が意味するものを改めて問い直すことだと思います。その点において、「ケアとは何か」ということを名寄市立大学でしっかりと学んだ人材を輩出していくことはとても意義があると思います。



関：ケアに対する価値観が学科間、個人間、集団間で異なることは避けられないことだと思います。「生（命）」を対象としているのですから。むしろ多様性をどのようにマネジメントするかが鍵となるように思います。経営学では、多様性が組織の成長、発展に貢献するという考え方がありますが、多様性に富んだ組織でなければ変化に対応することができなくなります。今後、保健福祉を取り巻く業界構造が大きく変化（進化）し続けていくでしょうが、そうした意味において、ケアに対する価値観が同質化していくよりも、逆に、ケアに対する価値観が多様化しなければ「ケア未来をひらく」ことができないように感じます。

「ケア」をしなくてはならないからこそ、連携教育がある

青木学長：本学のように専門職養成を前提にケアについて考え、教育することは非常に難しい。しかし、本学がケアを中心に据えた教育の方向性を打ち出していくことは、日本の専門職におけるケアに対する考え方をリードしていく上でもとても大切だと考えています。ある対象者に対するケアを考えたとき、そこには様々な専門職が関係するので、必ず連携の意識が重要になると思います。ケアをするために必要な連携とは何か、連携することによって何ができるのか、それを学ぶことができるように本学の連携教育を展開させていきたいと考えています。



長谷川：確かに、各領域を縦割りに考えるのではなく、連携する意識を常に持つことは、現場で働く上で非常に重要ですね。介護を考えたときに、私は看護の専門なので、看護の面からのケアはできますが、食のケアはできません。ケアの中で、食は重要な位置を占めていると思います。でも、私が連携教育の中で栄養学科の学生にケアの話をして、なかなか理解してもらえない現状があります。ケアの未来をひらくためには単独の職種では無理なので、連携教育の中でそれを考える材料を与えたいと考えています。



市川：先ほども話しましたが、管理栄養士には「指導」という側面が強いため、栄養学科の学生にケアという概念を植え付けていくことは難しいかもしれませ。でも、対象者には様々なケースがあります。病気の方や障害のある方など、それぞれの状況にあった食の提供を考える必要があると思います。そのためには、看護の観点や福祉の観点、そして保育の観点など様々な観点から考えられる力がとても大切だと思います。本学のような、様々な職種の考え方を身近に感じ、そして一緒に考える機会を与えられることは、将来現場に出たときに絶対に役に立つと思います。

松岡：福祉領域で連携のことを深く考えさせられたのは、東日本大震災の時ですね。震災の時には災害派遣医療チーム (Disaster Medical Assistance Team: DMAT)が活動しました。災害が起きた直後は、医療的なケアが必要ですが、それ以降は福祉的なケアが重要になります。災害直後とその後では、やるべきケアが全く異なってくるのが分かっています。そのため社会や生活上において求められる様々なステージで、専門職者らがやるべきことを認識し、役割を分担することができれば、自ずと連携が必要になり専門職間の連携、協働、協力が重要となります。本学の連携教育が、そのような意識を育む良い機会になればと思っています。

関：大学で学ぶ学問は、ある意味分かりづらいものばかりですので、連携教育も簡単には理解できないと思います。でも、私たち、教員側はそれが必ず将来的に役立つという信念を持って、ケアについて真剣に考える材料を学生に提供し、学生と一緒に議論し、そして自らも研究していく姿勢を持つことが大切だと考えています。それが、名寄市立大学の連携教育をより発展させ、素晴らしい専門性を持った学生を送り出すことにつながると思います。



<対談参加教員>

青木紀学長：社会福祉学科教授・京都大学大学院・博士（農学）・教育福祉論が専門
市川晶子：栄養学科講師・藤女子大学大学院・修士（食物栄養学）・給食経営管理論が専門
長谷川博亮：看護学科准教授・旭川医科大学大学院・修士（看護学）・精神看護学が専門
松岡是伸：社会福祉学科講師・日本社会事業大学大学院・博士（社会福祉学）・公的扶助が専門
中西さやか：児童学科講師・広島大学大学院・修士（教育学）・保育学が専門
関朋昭：教養教育部准教授・北海学園大学大学院・博士（経営学）・経営学が専門

ようこそ研究室へ！！

名寄市立大学の研究最前線を紹介します。

小学校入学初期における教科学習を支える認知促進プログラムの開発と検証

保健福祉学部 社会福祉学科

教授
瀬戸口 裕二



研究の背景

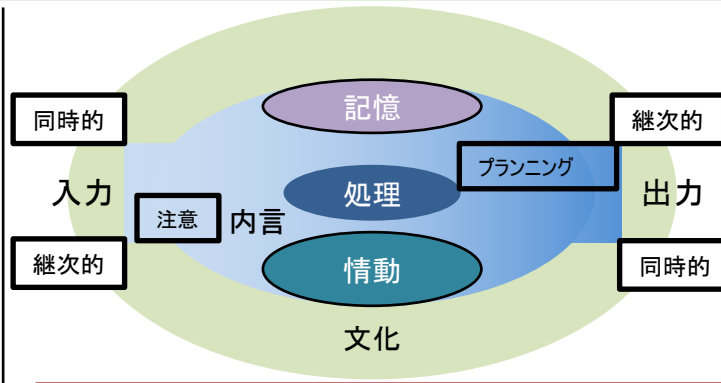
発達障害のある児童生徒を含めた特別支援教育は、教育学、認知科学、障害科学、心理学、社会科学などの横断的な研究課題をもたらし、教育の現場は、新たな体制下で教育全体に関わる大きなパラダイム転換に直面してきました。小学校入学前後の子どもが抱える行動調整における問題もクローズアップされています。この様な背景から、就学前後の教育では、学習や行動上の問題に共通した、子どもの「発達上の未熟さ」への専門的対応と認知処理に焦点化されたプログラムの確立が求められています。

研究の概要

本研究のプログラム開発は、基礎的認知能力と子どもの行動調整機能について、Das (1996) の認知的プランニングに主たる立場をおきます。Neglieri & Das (1990) は、Luria (1966, 1982) の言語と認知に関わる認知神経心理学的解釈に基づいて、PASS理論による認知処理モデルを提唱しました。PASS理論に基づいてカナダで開発されたのが、COGENT (Cognitive Enhancement) 認知促進プログラム (Das, 2004) です。ヴィゴツキーに端を発した神経心理学的立場では、他の知能研究が「知能は変わらないもの」として捉えているのに対して、情動や文化、人との関わりによって「知能は変わる」という立場をとっています (図1)。そこに、認知を促進していくことの可能性があります。

今後の展望

現在、COGENT認知促進プログラムの和訳が終了しました。日本語における読字、書字に関わる認知処理に適用できる改変を行い、PCやタブレット



情動が学習機構を動かす。意味が学習を維持する。

図：1 知能を形成する処理過程モデル



図2：鹿児島とのケースカンファレンスの様子

で操作できるプログラムにする作業に取りかかっているところです。このプログラムは、ネットワークを活用した利用も利点となるので、人材や情報が不足しがちな過疎地域、遠隔地域での同時活用も図られています。図2は、鹿児島県奄美市教育委員会と名寄市教育委員会を本学でつなぎ、テレビ会議システムを活用してケースカンファレンスを行い、プログラムの適用を検討している様子です。完成版の適用を急ぎ、検証作業に着手したいと考えています。

●関連する科学研究費補助金

- 平成24～26基盤研究 (C) 「小学校低学年を対象とするリテラシー・アセスメントに基づく学習支援プログラムの開発」
- 文部科学省「国際教育協力イニシアティブ」 (平成19年～20年委託事業)
- 文部科学省「LD, ADHD, 高機能自閉症等の発達障害向けの教材・教具の実証研究」 (平成18年度委託事業)

平成26年度 科学研究費補助金 獲得一覧 (瀬戸口教授と石川准教授獲得分を除く)

西村直道 (栄養学科：教授)：大腸水素によるメタボリックシンドローム抑制の新戦略創生 (挑戦的萌芽研究)

山本達朗 (栄養学科：講師)：脳の発生および発達を制御する脂質栄養の機能解析 (基盤研究 (C))

田邊宏基 (栄養学科：助教)：大腸発酵水素の全身供給の可能性とその栄養学的役割 (若手研究 (B))

結城佳子 (看護学科：教授)：空間的治療効果を重視した精神科病棟療養環境モデルの開発-眺望-隠れ場理論の活用 (挑戦的萌芽研究)

教師の指導力を高めるための学習支援システムの開発

保健福祉学部 教養教育部

准教授
石川 貴彦



研究の背景

2000年代からブロードバンドが急速に発達し、それを教育に活用しようと進められてきたのがeラーニングです。いつでもどこでも学習できるという遠隔教育の手段として導入されたのが発端ですが、近年では、普段の授業の中でeラーニングを併用する「ブレンディッドラーニング」が注目されています。私の研究は、各教師が描く指導方法の中にeラーニングを積極的に取り込んで、授業自体を活性化させることを目指したブレンディッド型の学習支援システム（LMS：Learning Management System）の開発です。

研究の成果

授業で用いる様々な機能をeラーニングの素材として用意し、教師はそれらの取捨選択を繰り返しながら、自分の理想とする教育に近づけていけるLMSを私の研究で実現しました。そして、このLMSを本学の教育にいくつか適用し、学生の使用履歴から効果を確認してきました。例を挙げると、教職科目で模擬授業の相互評価を実践し、生徒役の学生が、教師役の学生の授業評価をLMSで行います。その際、生徒役数十名の評価が瞬時に自動集計され、教師役にフィードバックされます。そうすると、正の字を書いて数を手集計する手間は一切無く、すぐさま授業の反省に取り掛かれるという訳です。他にも、評価コメントを生徒役が互いに読み合い、共感できるコメントを投票できる機能を設け、適切なコメントの書き方をおのずと教示できるような仕組みも入れています。

今後の展望

LMSの実例を増やし、多様な教育に対応できることを実証していきます。教職科目での実践のほか、本学の「就職支援ポータルサイト」もこのLMSで運用しています。現在は求人票の検索が主な機能です



図1 模擬授業の相互評価の様子

番号	質問	自己評価	他者評価	全体平均
1	「声」の大きさは十分だった	4.00	4.00	4.34
2	「視線」を生徒役の方に向けていた	4.00	3.81	4.27
3	授業の「目標」を明確に示していた	5.00	4.50	4.50
4	「スライド」をわかりやすく作成した	5.00	4.54	4.36
5	「発問・挙手・指名」を効果的に取り入れた	5.00	4.18	4.26
6	「説明」はわかりやすかった	3.00	4.27	4.37
7	授業の「時間」(5分間)を守っていた	5.00	5.00	4.01
8	授業の「展開」は、きちんと組み立てられていた	4.00	4.63	4.43
9	授業の「内容」は対象学年に合っていた	3.00	4.63	4.50

受講者からの一言コメント

- ・カラフルなスライドだったので、見た目にもわかりやすかったです
- ・後ろに座っている生徒の目も、もう少し見ると良かった
- ・スライドが視覚的にわかりやすく、小学校5年生に見せる内容としては楽しみながらできるものだと思います。

図2 評価結果の提示画面

が、今後は学生の検索履歴を元に、就職指導のサポートをする機能を考えています。この学生は最初こういった職種を検索したけど、実習を終えて別の職種を検索するようになったとか、進路の揺らぎを履歴で表現し、進路選択のヒントを提供できないかということを検討しています。

●関連する科学研究費補助金

平成24-26年度 若手研究 (B) 「機能追加と機能分割によるLMS開発サイクルモデルの構築」

小野寺理佳（社会福祉学科：教授）：ステップファミリーにおける孫と祖父母の関係に関する実証的研究（基盤研究（C））

吉中季子（社会福祉学科：准教授）：DV被害者に対する自立支援策の展開に関する研究（基盤研究（C））

江連崇（社会福祉学科：助教）：近代日本における更生保護思想史研究（若手研究（B））

関朋昭（教養教育部：准教授）：21世紀の学校運動部活動の在り方に関する探求（基盤研究C）

清水池義治（教養教育部：講師）：地理的表示制度における生産者組織を通じた地域空間ブランド・エクイティの向上（若手研究（B））

名寄でゆったり星を眺める

こんにちは。天文サークル「星楽流(ほたる)」です。

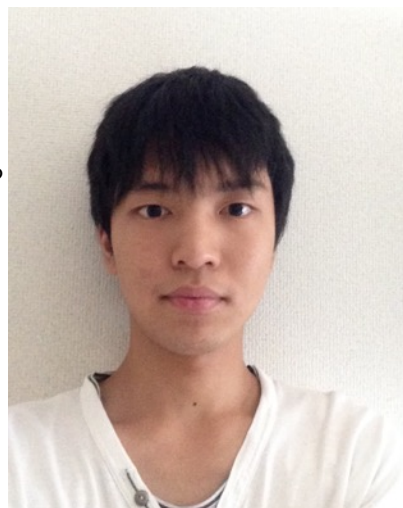
「星楽流」は、平成21年に発足しました。発足当時、名寄市では「なよろ市立天文台きたすばる」を建設中で、翌年のオープンを控えていました。新しい天文台で活動したい、そして天文台の活動に協力したいという高い志を持ったメンバーが集まり、「星楽流」は発足しました。

現在、「星楽流」は36人で活動しています。サークル活動は、「来たい人が来られるときに来て活動する」というゆったりとしたスタンスです。気軽に来られるサークルの雰囲気、「大学生」らしくて良いと感じています。今年はサークルへの勧誘の効果や天文に興味を持った新入生が多かったことにより、昨年に比べてサークルメンバー数が4倍になりました。メンバーは増加しましたが、活動スタンスは依然として変わらず、大学生らしくゆったりと活動しています。

「星楽流」の主な活動は、天文台で星の観測や天文台のイベントの手伝い、そして大学祭のプラネタリウムの上映などです。今年の大学祭のプラネタリウムでは、「春・夏の星座」、「秋・冬の星座」、「七夕星座と神話」の3つのプログラムを用意し、サークルメンバーの生解説で上映しました。また今年は、ものづくりサークル「のんすたいる」とコラボレーションを行い、「のんすたいる」が作成した天文関連の作品を展示し、プラネタリウムを見に来た方がさらに楽しめる空間を演出しました。

また、9月6日～8日に天文台で行われた「お月見観望会」では、7日限定で来場者にお汁粉ときな粉団子を無料で提供するイベントを行い、地域住民との交流も深まりました。お月見観望会のイベント告知にあたっては、ポスター作成は1年生メンバーが担当し、ポスターのデザインに関して高い評価を受けることもできました。「天文」サークルですが、天文以外の面でも、それぞれが得意とする技術や才能を生かし、昨年以上に充実した活動をしています。

私は、高校時代に天文部に所属していましたので、大学生になっても自然と天文サークルに入りました。でも、私の高校のように天文サークルがある高校は少ないため、ほとんどの学生は大学に入ってから星に興味を持って天文サークルに入ってきます。「星が好きだから」、「ただ空を眺めたいから」、そんな単純な理由でも私たちのサークルは新しい仲間が入ってくれることを待っています。知識がなくても楽しめる、そこが天文の魅力だと思います。日本でも有数の星がきれいな町「名寄市」で、私たちと一緒にゆったり星を眺めましょう。



天文サークル「星楽流」
松川 昂樹
北海道旭川東高等学校出身
社会福祉学科2年



「きたすばる」から見た月



お月見観望会でお汁粉を配布。市民の皆さんにお月見気分を味わっていただきました。

<名寄市立大学吹奏楽団>

- ・第53回名寄地区吹奏楽コンクール（8月3日）
大学C編成の部 金賞・全道代表
- ・第59回北海道吹奏楽コンクール（9月6日）
大学C編成の部 銀賞

<出場学生>

- 指揮：看護学科2年 多田佳緒里
- 栄養学科4年 横峰綾乃、山川美咲
- 栄養学科3年 繁泉佳苗、清野 睦
- 看護学科3年 木曾景太
- 看護学科2年 岸上絵梨花、谷山明帆
- 児童学科2年 栃内遥香
- 栄養学科1年 市橋莉菜、小枝沙穂里、左近良枝
- 看護学科1年 安倍暉恵、蝦名 綾、佐々木春乃、
長谷川愛子、村川瑛里
- 社会福祉学科1年 久保夏海
- 児童学科1年 川崎亜悠美



名寄市立大学吹奏楽団

<スポーツチャンバラサークル>

- ・第18回札幌市スポーツチャンバラ大会（6月15日）
野中紀鷹（栄養学科2年）：長剣初段・二段の部
準優勝
- 中野正太（社会福祉学科1年）：長剣無級の部 4位
- ・第二回北海道東北合同学生大会（6月29日）
野中紀鷹（栄養学科2年）：有段小太刀の部（3位）
有段長剣の部（敢闘賞）
有段二刀の部（敢闘賞）
- 名寄市立大学：団体戦（3位）



<柔道サークル>

- ・北部北海道柔道大会（5月11日）
深谷美紗世（看護学科3年）：高校・一般の部 優勝
- ・第12回道北市町村対抗柔道大会（7月13日）
深谷美紗世（看護学科3年）：女子の部 優勝

<北鼓童サークル>

- ・第23回YOSAKOIソーラン祭り（6月4日～8日）
出場



北鼓童サークル



スポーツチャンバラサークル

NCU Information

入学式 (4月7日)

2014年度「名寄市立大学・短期大学部入学式」が挙行されました。新入生195名（保健福祉学部147名、短期大学部48名）が大学生活をスタートさせました。



農業体験実習 (5月29日)

名寄市立大学だからこそできる体験の一つである「農業体験実習」が、名寄市内の農家の皆さんの協力のもと実施されました。学生は、田植えや作付けなど慣れない作業に悪戦苦闘していましたが、貴重な体験になったことと思います。



サイエンスカフェ in 名大祭 (7月19日)

ドリンクとお菓子を楽しみながら、サイエンスに触れるひととき「サイエンスカフェ」が、大学祭の中で市民の方を交えて行われました。栄養学科の千葉昌樹准教授（応用栄養学）が講師となり、災害時に必要な栄養補給について、実際に非常食の試食をしながら楽しいひとときを過ごしました。



編集後記

今年度よりWeb上で大学の様子がひと目でわかるWeb広報誌を発行します。毎年4月と10月に発行し、学生や教職員の活動を把握できるような構成を目指していきます。特に本学を志望する高校生、在学生、卒業生、保護者の方、そして名寄市立大学が関わる地域の方に、この広報誌を読んでいただき、本学の取り組みを理解していただければ幸いです。この創刊号では、ソチオリンピックで銀メダルと銅メダルを獲得した葛西選手をお招きし、学生との座談会を実施しました。今後も一流の著名な方の雰囲気や学生さんが直接触れ合える機会を設け、広報誌に掲載していきたいと考えています。

名寄市立大学広報Web委員長 西村直道

<広報Web委員会>

- 西村直道
- 村上正和
- 忍正人
- 傳馬淳一郎
- MEADOWS Martin
- 山本達朗